



「国が大きく変わるのをじつと期待するのではなく、小さくてもいいから『くに』を変えてみてはどうだろう」が、本書の発想である。そしてこの「くに」とは、「共有する風景を実感出来る空間」を基本単位としている。即ち生活を営む最小の集落単位をさしている。

そして「生き生きした『くに』が存在せずして、その延長上に成り立つ『国』が、どうして堅牢でありえよう」と問い、「大きく変わる」から「小さく変える」への転換で、この『くに』おこしが、やればできることを実例でもってする」としている。

智頭町は、鳥取県の東部に位置した扇状地である。人口一万人、高齢化率二四％で、昔から杉の名産地として知られる伝統と格調のあるまちである。農業よりも林業のウエイトが高く、山陰地方でも屈指の林業地域で、森林組合がむしろ農協よりも元気があるといわれてきた地区で、農林中金の林業融資も一九六〇年代以降大活用されている。当町も過疎地域指定地区である。一般にこうした地域では、過疎予算で、「見かけ上は、立派な施設が建ち並ぶが、建てた

## 『地域からの挑戦』

### 鳥取県・智頭町の「くに」おこし

岡田憲夫・杉万俊夫 著 (岩波書店)  
平塚伸治・河原利和

を見ている。そして九七年度には市ノ瀬など七集落が、九八年度は二集落、九九年度は一集落、二〇〇〇年度は四集落が、「ゼロ分の一村おこし運動」を立ち上げた。

私の立場からすると、一番気になるのは協同組合運動の原点となる農協なり森組の役割であるが、本書からは浮き彫りにはされず、また各部落で立ち上げた実情の詳細についても紙数の制約からか、多くをさかれていない。残念である。この本で特に強調されているのは、「くに」おこしは運動であり、意識の改革だということである。そして伝統ある智頭町

後はお荷物になるハコ物が多い」。そして「各地を金太郎飴に変えてしまう」。が、当町はこうした「惰性的な過疎」を否定する。過疎の中でくらしを活性化する基本、ドッコイ生きていけるよ、と言う事例を本書は見せてくれるのである。即ち、MTコンビ(前橋、寺谷両氏)と行動を共にする人達が集まって八八年には約三〇人の智頭活性化プロジェクト集団が出来、そして各集落単位の振興計画が実践されて行った。例えば、八八年の八河谷集落はログハウス群「杉の木村」が開発され年間一万五千人の来訪者

の歴史・文化を大切にしたい「くに」づくりであることが明示されており、まさに今の国の政治課題である構造改革へ、地域での一歩として、先鞭となることが期待される。

かつて守田志郎はその著「日本の村」朝日新聞社、七三年)において、「小ささという本性をけつして崩そうとしない部落の命脈の長さを知る時、同時に我が住むありかに比べてその重さの計り知れなさに感じ入るのである」と書いた。都市が、農村を思うことの意味をこの地域主義に見出すことが出来る。調和の取れた社会構造の到来こそ期待されている。

市場経済、グローバルイズム万能といった昨今の社会状況だが、生き方もまたそこまで問われてきているのではなからうか。何れにしてもこの智頭町の元気の源を確かめておくことは大切なこと。あきらめずに気づいたところから「くに」づくりは、スタートしているのだ。

地域主義が言われて久しいが、社会や経済のシステムとその運営状況を我々地域の住民が、よくみて考え参加して行く方向を取れることが大切であろう。人任せでは取り返しのつかない時代になってしまふ。既にその現象も始めている。我が系統組織にとつても、原点を見直す意味で本書は示唆するところの多い本である。

(二〇〇〇年一〇月、六八頁、四六二頁)

(真田忠雄)